

見えるようになった人の証し

ヨハネ福音書9:13-25

【新改訳 2017】

- 9:13 人々は、前に目の見えなかったその人を、パリサイ人たちのところに連れて行った。
- 9:14 イエスが泥を作って彼の目を開けたのは、安息日であった。
- 9:15 こういうわけで再び、パリサイ人たちも、どのようにして見えるようになったのか、彼に尋ねた。彼は、「あの方が私の目に泥を塗り、私が洗いました。それで今は見えるのです」と答えた。
- 9:16 すると、パリサイ人のうちのある者たちは、「その人は安息日を守らないのだから、神のもとから来た者ではない」と言った。ほかの者たちは「罪人である者に、どうしてこのようなしるしを行うことができるだろうか」と言った。そして、彼らの間に分裂が生じた。
- 9:17 そこで、彼らは再び、目の見えなかった人に言った。「おまえは、あの人についてどう思うか。あの人に目を開けてもらったのだから。」彼は「あの方は預言者です」と答えた。
- 9:18 ユダヤ人たちはこの人について、目の見えなかったのに見えるようになったことを信じず、ついには、目が見えるようになった人の両親を呼び出して、
- 9:19 尋ねた。「この人は、あなたがたの息子か。盲目で生まれたとあなたがたが言っている者か。そうだとしたら、どうして今は見えるのか。」
- 9:20 そこで、両親は答えた。「これが私たちの息子で、盲目で生まれたことは知っています。
- 9:21 しかし、どうして今見えているのかは知りません。だれが息子の目を開けてくれたのかも知りません。本人に聞いてください。もう大人です。自分のことは自分で話すでしょう。」
- 9:22 彼の両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちに恐れたからであった。すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者がいれば、会堂から追放すると決めていた。
- 9:23 そのために彼の両親は、「もう大人ですから、息子に聞いてください」と言ったのである。
- 9:24 そこで彼らは、目の見えなかったその人をもう一度呼び出して言った。「神に栄光を帰しなさい。私たちはあの方が罪人であることを知っているのだ。」
- 9:25 彼は答えた。「あの方が罪人かどうか私は知りませんが、一つのことは知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。」

【祈りながら考えよう】

- (1) 神が安息日を制定された目的は何ですか。盲人の目をあけることは安息日違反ですか。
- (2) 盲目がいやされた人は、この時点で主イエスをどのようなお方とご思っていますか。
- (3) 盲目がいやされた人は、どのように証ししていますか。

【解 説】

(1) 安息日に対する誤解

生まれながら盲目であった人に対して、主イエスがつばきで泥を作り、その人の目に塗って、シロアムの池へ行って洗うようにと言われ、その通りにしたところが、その盲人の目は見えるようになった。ところが、主がそれをされたのが安息日であったため、大変なことが起こった。主イエスがされたことは、安息日を破ることだというのである。

安息日の戒めは、出エジプト記20：8～11にある。神が天地創造において七日目に安息なさって、この日を喜び、祝福された。造られた私たちも、神の創造のみわざを覚えて、神と共に安息にあずかり、祝福を受ける日とされている。

また申命記の5：12～15にもある。神がユダヤ人をエジプトの奴隷状態から連れ出して安息を与えたゆえに、安息日を覚えて聖別し、労働してはいけないことを教える。安息日は、神が天地を創造したことを覚えるとともに、神がユダヤ人の歴史を救い、ユダヤ人が神の民であることを覚える記念日である。

パリサイ人の中の律法学者たちは、安息日を守るということについてのモーセの律法とは別に「細則」を作り、それを守ることが、安息日を守ることになるのだと教えていた。ユダヤ教の教典であるミシュナーという本のシャバット(安息日)篇には、安息日にしてはならない労働のリストが39挙げられている。

パリサイ人たちは、安息日は、人の体、心、魂にとってよいことのために使われるはずであったことを理解できなかった。安息日を守ることが、あわれみや思いやりの行為を禁じることなのでは決してない。病人をいやすことは、決して安息日を破ることはないのである。

「安息日は人のために設けられた。人が安息日のために造られたのではない」(マルコ2:27)。

(2) ユダヤ人議会の中に分裂が起こる

主イエスがなされた奇蹟を見ていた人々は、目が見えるようになった人を、パリサイ人たちのところに連れて行った。このパリサイ人たちの所は、おそらくユダヤ人議会(サンヘドリン)のことと思われる。

ユダヤ人議会の中のある人々は、何が起こったのかと尋ねて、それが分かると、こう結論を下した。

「その人は安息日を守らないのだから、神のもとから来た者ではない」

彼らは主イエスが盲人に対してなされたことが、「彼らのおきて」(細則)に反していたと判断したからである。

しかし、別の判断を下した議員もいた。その人々はこう言った。

「罪人である者に、どうしてこのようなしるしを行うことができるだろうか」

これは、おそらくニコデモたちの意見であったに相違ない。それは、ニコデモが以前、夜主イエスの所へ来て、言った言葉と、その内容がそっくりだからである。その時こう言っている。「先生、私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなさるこのようなしるしは、だれも行うことができません」(ヨハネ3:2)。この少数派には、ニコデモやアリマタヤのヨセフやガマリエルのような人たちが属していたにちがいない。こうしてユダヤ人議会の中に分裂が起こった。この分裂は、よい影響を及ぼし、彼らは、この件を初めからもっと十分に調査し、盲人だった男からもっと聞き出す必要があると認めた。

(3) あの人についてどう思うか

イエスのために証しをする機会がこの男に再びめぐってきた。パリサイ人たちは改めて尋ねた。

「おまえは、あの人についてどう思うか。…」

すると、彼はこう答えている。「あの方は預言者です」彼がここで「預言者です」と言っているのは、来たるべき救い主を意味する「あの預言者です」という言い方ではないが、後で彼が「神から出ておられる」方(ヨハネ9:33)という言い方をしているところから、神から来られた超自然的な人物を意味していたことは確かである。

(4) 両親に尋ねる

ユダヤ人議会の中には、奇蹟が起こったということはまだ信じない者が多くいた。そこで、彼らは男の両親を呼び、どんなことを言うか聞いてみようということになった。いやされた者と彼の両親が向かい合わされて尋問された。

「この人は、あなたがたの息子か。盲目で生まれたとあなたがたが言っている者か。そうだとしたら、どうして今は見えるのか。」それに対して、両親はこう答えている。

「これが私たちの息子で、盲目で生まれたことは知っています。しかし、どうして今見えているのかは知りません。だれが息子の目を開けてくれたのかも知りません。本人に聞いてください。もう大人です。自分のことは自分で話すでしょう。」

両親は、その男が確かに自分たちの息子であり、また生まれつき盲人であったことをはっきり証言した。しかし、どのようにして見えるようになったのか、また誰が見えるようにしてくれたのかについては、本人に聞いてほしいと答えた。それは、ユダヤ人議会が、「イエスをキリストであると告白する者がいれば、会堂から追放する」と聞かされていたからである。

この追放は、ユダヤ教にかかわるあらゆる特典がなくなることはもちろん、生活の手段が奪われてしまう。このようなわけで、両親が息子のほうに証言を差し戻したのは、ユダヤの指導者たちを恐れていたためであった。

(5) 本人に尋問する

そこで、ユダヤ人議会は、もう1度、本人を呼び出し、尋問する。

「神に栄光を帰しなさい。私たちはあの方が罪人であることを知っているのだ。」

このように彼らが言ったのは、この男が元盲人であって、今見えるようになったことは、どうやら否定できそうもないと思ったため、たとい見えるようになったとしても、イエスという男は罪人なのだから、栄光はあのイエスにではなく神に帰すべきだと言いたかったようである。

神がいやしを働かれたのであって、あなたの目に泥を塗った人ではない。その人はいやしを行うことはできなかったはずだ。なぜなら彼は安息日を破る者であり、罪人だ。彼のような罪人に、あなたをいやすことはできなかったはずだ。

(6) 証しのモデル

彼にわかっている明確な事実が2つあった。①私は盲目であった ②今は見える
彼は知らないことは知らないと答えている。そして知っていること、自分が体験したことを語っている。私たちの証しもそれと同じである。自分が体験していないことを話すのではない。主が自分の身の上になして下さったことを、ありのままに言えばよいのである。使徒たちも同様の証しをしている(使徒4:19-20)

「あの方が罪人かどうか私は知りませんが、一つのことは知っています。

私は盲目であったのに、今は見えるということです。」

主を信じる前はどのような状態であったのに、主を信じてからはどうなったのかという事実を語ればよい。彼は、盲目であったのに、今は見えるようになったという「事実」を話している。私たちが罪を持ったままだった時、霊の目が盲目で、霊的世界のことは、皆自分からなかった。しかし、罪が赦され、霊の目が開かれると、霊的世界のことがはっきり見えるようになった。その証言を否定できる人はひとりもない(聖歌463/神なく望みなく)。

